

本当の戦争を聞く

鹿児島玉龍中学校 三年 盛 利香子

「七十年前の日本はね・・・」

祖父は目に涙をうかべながら、七十年前の日本で何があったのかを静かに語り始めた。

終戦して七十年という節目にあたる今年。特に、様々なテレビ番組で戦時中の状況を目の当たりにする機会が多い。その中でも戦争を体験し、乗り越え今を生きる八十代から九十代の方々が戦争を思い出して、語ってくださるものが一番印象を受けた。教科書や本で学習したことで、「知っているつもり」になっていた戦争の実態。それを生の声を聞くことで、より耳に、心に強い印象と衝撃を受けたのである。しかし、それでもテレビから見ると人の表情や声だけでは、本当のその方の気持ちを読みとることは困難だろう。元々、戦争に強い興味を持っていた私は、誰か戦争を体験した方に実際に話を聞きに行きたいと思った。それで、現在八十六歳で十代の時に戦争を経験した私の祖父に話を聞こうと、祖父の家におしかけたのだった。祖父は当時を思い出すためなのか、「昭和十九年」と紙に書いてから当時のことを話し始めた。当時十八歳だった祖父は、高等科という今の中学校を卒業してから海軍に志願した。「志願」とは自分から兵隊になるといふことなので、危険なのにどうして希望したのだろうと思った。実はその頃、海軍や兵隊は少年たちの憧れの存在だったのだ。祖父も、かっこいい海軍兵になりたいという気持ちで志願したのだそう。祖父は長崎県佐世保市相浦にある基地に入団した。三ヶ月ほどの訓練を受け、海軍基地の守備隊として日々を過ごしていた。

梅雨の時期の、雨の降る深夜だったという。突然、空から米軍の落とす焼夷弾が降ってきた。米軍は市の中心部を狙って攻撃を行っ

てきたのだ。祖父たち守備隊は、米軍の飛行機を狙って必死で大砲を撃つが、全く当たらず、まるで菌が立たなかったらしい。翌日、市の中心部に行くとき、一面が焼き野原で、焼けた死体や黒く焦げた米が落ちていたという。何もかもが失われたような状況に、祖父はただぼう然としていたそう。市民はみな、雨だから大丈夫だろうと油断していたがために、死者は千二百人にもものぼったらしい。空から焼夷弾を落とされてしまえば、私たちは何も抵抗できない。それを分かった上で、ただ普通に暮らしたいと願う多くの市民の命が奪われたのだと思うと、心が痛む。しかし、戦争はまだ終わらない。

祖父は次に宮崎県内海の間魚雷の特攻機地で、守備隊として配属された。それが昭和二十年七月ごろだったそう。 「人間魚雷」とはその名の通り、魚雷の中に搭乗員が入って操縦し、敵の船目掛けて出撃するのだ。しかも脱出装置はなく、一度出撃すれば攻撃の成否に関わらず搭乗員の命はないという、何とも残酷な特攻兵器だ。しかし、特攻基地でも米軍からの攻撃はもちろん容赦なくある。祖父がさつきまで居た、搭乗員の兵舎に焼夷弾が落とされ、大切な友達を何人も失ったそう。もし、祖父がそのまま兵舎に居たらと考えると本当にぞっとする。そして祖父は何人もの特攻隊員を見送り、心を痛めながら生きていたという。そして、昭和二十年八月十五日、ついに戦争は終わったのだ。

祖父は話し終わった後、涙をふいて何かを考えているような、そんな顔をしていた。今、隣でそんな表情の祖父が元気に生きているというところが、どんなに大切なのだろうかと思えて強く感じていた。祖父が話をしてくれたおかげで、本当の戦争が前よりは分かった気がする。それでも祖父の当時のつらさや悲しさは計り知れないのが事実だ。しかし、私が今回感じたつらさや悲しみが祖父とは比べものにならないけれども、感じたことに意味があると思う。二度と戦争をくり返さないために私にできることは何か、もつと探していきたい。